「底が突き抜けた」時代の歩き方 351

映画の中で朦朧としている男たち(その1)

－映画『イン・ザ・ベッドルーム』『プレッジ』

選択不可能な極限状況下で人は生き残るために、その状況に合わせて自分自身をどうにでも変えていくことのできる存在であることを、映画『鬼が来た！』や『es [エス]』について論じながら書いてきたが、改めて振り返ってみると、それらの映画の登場人物はすべて男であった。というより、戦争や模擬監獄の極限状況に放り込まれて身の毛がよだつようなおぞましさを露出するのは、これまで男の舞台であったというべきかもしれない。『鬼が来た！』で捕虜の日本兵役を演じた俳優の香川照之は映画の中だけでなく、中国の撮影現場で実際に捕虜の身そのものであったと語り、軍事訓練や「気をつけ！」を撮影の間何度も繰り返す中で、しだいに日本兵の精神状態になって過ごしたと撮影日記に記している。

彼の話から撮影期間中、ずっとどこか朦朧としていた印象を受けるが、そういえば戦争や模擬監獄の極限状況に放り込まれた男たちは誰もが、自分が自分でなくなっていく朦朧とした気分を味わっていたようにも感じられる。また、戦時下の精神状態が極まってくるなかで起きたチビチリガマの集団自決についての語り手のほとんどが女性である所為か、その証言に出てくる女性の輪郭が鮮明なのに対して、男性の輪郭はどこか不鮮明であり、そこでも男性は朦朧としていたのかもしれない。大体証言者が圧倒的に女性であるのはどのような理由からだろう。

『サンデー毎日』(02.10.6)に、英国で全科目で男子をしのぐ女子の学力上位が話題になっているという記事(フリージャーナリスト・多賀幹子)が掲載されている。イギリスでは5～16歳までの義務教育期間の最終学年に「GCSE」という全国統一の義務教育終了資格を受けることになっているが、その成績結果が「完全な女子の学力上位」となったという。GCSEの実施時期はほとんどの学校で毎年6月で、今年度は千校以上の学校、約50万人の子供が受験した。多くの子供は16歳で受験するが、とくに年齢の制限はなく、この公的試験で女子は英語、歴史、芸術、地理などほとんどの科目で男子に圧倒的な差をつけた。人気の科目である「情報テクノロジー」でも女子と男子の差は昨年よりも開いた。この原因については、母子家庭が急増し、しかも小学校の女子教員が90%以上のため、「男子が勉学で後れを取るのは、成長過程で良いお手本(の男性)と出会わないからだ」と考えられ、さまざまな努力が試みられたが、効果はなかった。

「男子が振るわないのは」ラディッシュ・カルチャー (laddish.culture) が蔓延している

からではないか」と指摘する全国校長会のデビッド・ハート会長は、「学校の成績はとかく`自尊`の気持ちや自信に結びつきやすく、将来にわたって影響を残す。もっと自分を大切に、怠け心と闘ってほしい」と男子の奮起を促す。《ラディッシュ・カルチャーとは、男の子が男友達や女の子の前で「勉強なんて、やってられないよ！」とポーズを取ることだ。`室内で勉強するよりも、戸外でサッカーボールを蹴っているほうが男らしい`と考え、ガリ勉を恥じる。青い顔をして教科書に首を突っ込むのは`アン・クール(カッコ悪い)`なことと見なしてしまうのだ。》

女子の学力上位が議論されることについての反発も多く、男子のほうが学力上位であったなら、こんなに騒ぐだろうかという問いかけも出ているが、当の男子は「女子の方が忍耐強く、考え方が前向きだ」「きっちりと漏れなく勉強するのは女子」「女子は、きちょうめんにノートを取る」と、その優秀さを認めて自然に受け入れている。」GCS Eの後の大学進学までの二年間の試験勉強の結果でも女子は男子を圧倒しているだけでなく、《大学でも「女子の快進撃」は続き、トップの評価である`ファースト`を取る学生の割合は女子の方が多い。英国の医学部では女子学生が60%と過半数を占めている。20代に限れば、弁護士も女性のほうが男性より多い。

そんな状態にもかかわらず、社会での性差別は厳然たる事実である。男女の賃金格差は縮まってきたとはいえ、女性はまだ男性の84%に抑えられている。大手企業で女性役員がいるのはほんの7%。来年から父親の育児休暇導入が法律決定されたものの、家庭と仕事の両立は必ずしも簡単ではない。そんな中でも、英国の若い女性は「まじめに頑張っ、勉強を続けている」のだ。筆者は、イギリスのような「女性の学力優位」の流れが、日本においても`近年来`に定着することを予測している。この英国の記事に言及したのは、女性の頑張りよりも、男性が`朦朧としつつある`印象を受けたからだ。周囲を見回しても老若を問わず、男どもの朦朧としている貌付きに出会うことのほうが多い。だいたい、殺人・傷害の犯行に男が多く、凄惨な事件を惹き起こす少年たちが激増しているのも、朦朧としているからではないのか。そんな傾向は映画にも如実に反映しており、実際最近の映画には朦朧としている男の登場が驚くほど多い。それらの映画を観た順番に取り上げてみる。

映画『イン・ザ・ベッドルーム』は、一人息子を失ったその喪失感に耐えられずに復讐を決行する夫婦の物語である。アメリカ北東部のメイン州のさびれた静かな港町で、開業医のマットは町の合唱隊のコーチをしている熟年の妻ルース、大学生の一人息子フランクとごく平凡で穏やかな家庭を築いている。だが夫妻にとってフランクが幼い二人の子のいる年上の女性ナタリーと親密なのが気がかりである。ナタリーは別居している暴力的な夫リチャードとの離婚を考えている。夏休みの平和な昼下りに事件が起きる。その日も愛し合っているフランクとナタリーが彼女の家にいるところに、不機嫌な夫が帰ってきてナタリーを虐待し始めたので、フランクがそれを止めようとして揉み合っている最中に、夫の持っていた拳銃で撃たれて死ぬ。ナタリーもその現場を目撃していな

かったために、警察は殺人ではなく拳銃の暴発による過失致死として夫の身柄を送検し、事情聴取をしても確証が得られないために、推定無罪として裁判を待つ間の容疑者の身柄は執行猶予として保釈される。

その場の状況からすれば、興奮した夫がフランクを射殺したように受けとめられるけれども、最も身近にいたナタリーは避難していて銃声しか聞いていない。だがもしかすると、揉み合っているうちにフランクが銃を奪い取って夫を射殺することになるという、逆の事態だって考えられないわけではない。実際にはフランクが撃たれて死んだのだが、カメラはその現場を（わざと）撮ってはおらず、ナタリーに寄り添っていた。事実を知っているのは夫のみであって、殺人事件であるかもしれないし、夫が供述するように暴発事故であるかもしれないという、白黒のはっきりしないグレーゾーンに、一人息子を失った悲哀に包まれている老夫婦の持って行き場のない憤怒が蟠^{わたかま}っていきばかりであった。

殺人事件か暴発事故かというグレーゾーンの「すっきりしなさ」は、夫と別居中ではあるけれども正式に離婚していない子連れの子の年上の女に、老夫婦の期待を一身に担っている建築家志望の一人息子が惚れるという「すっきりしなさ」の結末であったとみなされる。彼らの恋愛に羨ましさを抱いていた父親とちがって、不安を抱いていた母親こそがその「すっきりしなさ」に鋭敏に反応し、どっちつかずの状態に決着をつけざるをえなくなっていく。母親からすれば、自分の目の前から一人息子が突然いなくなってしまったことが全てであって、殺人か事故かはどうでもよいことである。一人息子を奪われたことには変わりはない。息子があの子連れ女とかかわりさえしなければこんなことにはならなかったと母親は女を憎悪し、葬儀からしばらくして訪れた彼女の頬をいきなり平手打ちにする。彼らの関係を黙認していた夫である父親にむかって、息子とナタリーの付き合いを容認していたのは、あなたもあの女に気があったからでしょう、となじる。

悲しみを全身に露わにする妻はうまく悲しみを表現できない夫を「なぜ、何も変わっていない、という顔をするの？」と喋りつづけて責め、殺人事件として立証する決め手を持たない弁護士に業を煮やしながらも理性を保っていた夫も、`お前は昔から息子を認めたことがない`と遂に爆発し、平和だった家庭は息子の死を契機に崩壊に瀕する。このままでは夫婦の関係も壊れ、自分もダメになっていくと思い直した妻は、それまでの引きこもり状態から外へと一歩を踏み出していく。ところが、久しぶりの合唱隊の指導の帰途、立ち寄ったスーパーで息子を撃ち殺した男が平然と買い物をしているのに出会って、彼女は呆然として立ち尽くす。仕事から帰ってきた夫は、暗い部屋のなかで背中を小刻みに震わせて怒りを燃やしている妻の姿をみて、決心する。彼女が自分に何を望んでいるのかをはっきりと見て取ったのだ。拳銃を手にした夫は男を撃ち殺しに行く。

題名の「イン・ザ・ベッドルーム」は、一人息子の漁師であった祖父が「ロブスターのワナ（ベッドルーム）へ三匹以上入ると、爪がもげる」と語るくだりから来ているの

だろう。つまり、一つの仕掛け箱（ベッドルーム）に三人の男女が入ると、狭い箱の中では誰かに死が訪れるということだ。だが、この「ベッドルーム」は息子と恋人とその亭主の関係をあらわすだけでなく、息子が殺されてからは夫婦の「ベッドルーム」へと移行していく。夫婦のベッドルームには息子の死後、息子を殺した男の影が色濃く射し込んでおり、それを最も象徴しているのが、男を銃殺した夫の朝帰りのシーンである。夫が静かに部屋に入ると、妻がベッドに座って待っており、一言、やったの、と聞く。夫はああ、と答えてシャワーを浴びる。

ここで想起するのは、ナンニ・モレッティ監督の映画『息子の部屋』である。この映画では同じ息子ではあっても一人息子ではなく、しかも限りなく殺人に近い事故死ではなく水難事故死であったが、父が事故死の全責任を背負い込もうとすることによって、家族は崩壊の危機にまで追い詰められていった。『イン・ザ・ベッドルーム』も『息子の部屋』も、愛する息子を失った悲しみを家族はどう乗り越え、家族を見舞った喪失感とどう向き合うのかというテーマに直面していたが、『息子の部屋』は、息子を失った関係が新たな関係を生み出していることを家族が、とりわけ父親が受け入れようとすることで、それまでの家族の関係から各自がそれぞれの新しい一歩を踏み出していく予感が湛えられていた。しかし、『イン・ザ・ベッドルーム』のほうは、『息子の部屋』とは全く逆の展開を辿ることになった。

『イン・ザ・ベッドルーム』の夫婦が直面していたのは、悲しみはただ悲しみであり、喪失感は深まることはあっても薄らぐことはないという状況であった。一人息子の死と共に、彼らは突然の暴力によって将来の夢さえも奪われてしまったのだ。『息子の部屋』の亡くなった息子のガールフレンドが新たな関係を育んでいるのを見て、家族が喪失を喪失としてだけではなく、新たな関係の発生でもあるのを確認するというような、ほのぼのとした展開がどこからも訪れてきそうになかった。夫婦は一人息子をもぎ取られ、息子が愛していた彼女も恋人を失ったうえに恋人の両親、特に母親から怨まれるという仕打ちを被らねばならなかった。誰にとっても、喪失は喪失以外のなにものでもなかった。しかも息子を射殺したかもしれない男は白昼堂々と何食わぬ顔をして町中を歩きまわっているのだから、夫婦にとってはやりきれない毎日であった。

そんな日常がこの先ずっと続くなら、自分たちの関係が壊れて、自分も妻も二度と立ち上がれなくなっていくという思いが日毎に申し掛かってくるとき、夫がなすべきことは妻の意を汲んで男を殺すこと以外になかった。もし自分がやらなければ、妻が男を殺すのは目にみえていた。もう復讐以外に自分たちのやるべきことはなかったのだ。そう思って夫は実行に移した。だが、夫には男を殺すことによって得られる充足感のようなものが微塵もないのが窺われる。妻が望んでいたことを仕事として片付けたという感じなのだ。そこが、なにとはともあれ、男の存在を目の前から消し去ってくれることだけを願っていた妻とは異なっていた。妻はなににも考えようとはしていなかったが、夫は男を殺したあとに自分たちを訪れるものが幸福や満足ではなく、自分の犯した罪の重さに苛

まれる苦悩の日々であり、息子を失った妻の孤独が少しでも慰められるものではないことを感じ取っていた節がみえる。

おそらく男を殺すことは妻にとっては報復であり、夫にとっては制裁として考えられていたにちがいない。夫婦は一人息子を失った悲しみをぶつける目標を男に定めたととき、息子は男に殺されたとほとんど思いこまれていた。というより、一人息子を突然自分たちの手から奪い取ってしまった理不尽な出来事を自分たちに納得させるためには、どうしても男が息子を殺したことにならねばならなかった。たとえ暴発事故であったとしても、息子が亡くなったという事実が引っくり返らない以上は、妻にとっては殺されたも同然であった。息子が死んで男がぬけぬけと生きていること自体が許されなかったのだ。これは理屈ではない、感情なのである。感情が許さないと沸りたつ妻の怒髪に押し上げられて夫は男を殺したが、その殺しが一方的な仕打ちであることを夫が承知していなかった筈がない。

実際の出来事というものが度々そうであるように、映画では息子が銃に撃たれて死ぬ場面は描かれなかった。もちろん、母親が息子を殺したのは男であるというように決めつけることはとてもできなかった。もし不運な事故死であったなら、男が夫妻の手で殺されなければならない謂れはなに一つなかった。それに、息子と男が揉み合うことになる場面の到来についても、男からすれば、まだ離婚していない自分の女房にチョッカイを出している息子に責任があるといえなくはなかった。男と女房の関係はあくまでも自分たちの問題であるのに、間男のように息子が自分たちの間に割って入ってくること自体が許せなかったし、勢い憎悪が募ってくるのは避けられなかった。事件後、男が保釈されて平然と町の中を出歩いているのも、相手の事故死に良心の呵責を覚える必要はないと思われていたからかもしれないし、母親が決めつけたように、息子を殺しておきながら大きな顔をして振る舞っているわけでもないかもしれない。

夫は男が息子を射殺したという確証が得られないなかで、すべての責任を男に一方的に負わせることはできないのをおそらく感じ取っていた。にもかかわらず、妻の望みを叶えるように夫は男を射殺した。そこには何のためらいも感じられなかった、あたかも害虫を駆除でもするかのように。そうしたところで、もう二度とあの平和で穏やかな日々が妻と自分の許に戻ってはこないことを知りながら、暗闇の中で男を殺した自分の帰りを待っていた妻がもたれているベッドの中に夫はもぐりこんだ。夫が男を殺したのは妻のためだけではなく、自分や息子の恋人のためでもあった。妻がひそかに見抜いていたように、若くピチピチした姿態をなまめかしく魅力的に放っている息子の恋人を羨ましげにそっと見つめる夫の視線に、彼女への想いがあらわれていた。男たちを次々と虜にしながらも、女として不幸な人生を辿る彼女の甘美な翳りに男としての盛りを過ぎた夫も引きつけられていたのだ。その想いからすれば、男は息子を殺したかどうかにかかわらず、夫にとって邪魔な存在であった。

映画は夫が男を殺した後の、殺人事件としてのみならず、夫婦や息子の恋人との関係

をめぐる展開を描かずに、復讐への罪の意識だけではない複雑な余韻を画面に暗示したまま幕を閉じるが、一緒に暮らしている妻の、もはや夫である自分の存在が眼中になく、死んだ息子への想いだけでかろうじて日々を支えているような、老残を醜くさらけだしている姿からたえず強迫的に発散される耐え難さの念と、男たちとの関係で不幸になりながらも男に頼らずには生きていけない魅力的な若い女への想いの中で、夫は朦朧としながら男を射殺しに行ったというイメージが浮かんでくる。息子と男が揉み合う出来事から生じた息子の死（射殺）と対比するなら、妻と息子の恋人への想いが揉み合う夫のなかから生じた男の射殺とみえるし、若い女の不思議な魅力がいずれの場面でも大きく射し込んできている点で、朦朧としていたのは夫ばかりではなく、息子も男もそうであったのかもしれない。

『イン・ザ・ベッドルーム』は昨年のアカデミー賞主要5部門（作品・主演男優・主演女優・助演女優・脚色）にノミネートされた作品であり、主人公の夫を演じるのは『フル・モンティ』のオジサン役のトム・ウィルキンソン、妻役はシシー・スペイセク、魅力的な息子の恋人役は『いとこのビニー』でアカデミー助演女優賞を獲得したマリサ・トメイ。俳優だったトッド・フィールドの初めての監督作品であり、ロブスター漁やロブスターの習性に象徴的な意味を持たせている点で、同じ俳優のショーン・ペンがドラマに狩猟や釣りのエピソードを絡ませて、狩る者と狩られる者の関係を法や野生の掟のなかで描く手法と似通っているのが感じられる。

『イン・ザ・ベッドルーム』では、男たちの朦朧性はカメラによって曖昧にされていたが、ショーン・ペン監督の映画『プレッジ』では、むしろ逆にカメラによって男の朦朧性が際どく映しだされている。この映画を観ていると、男が命を懸けてなにかをやらうとするときはすべて、朦朧状態に陥っているときであることを示唆しているようにも思われる。題名の「プレッジ」とは固い約束とか公約という意味である。定年退職を迎えた老刑事ジェリー（ジャック・ニコルソン）の退職を祝うパーティのさなか、ネバダ州リノの郊外で白人の少女の遺体が雪の中で発見される。同僚たちに引き留められながらも定年までにまだ6時間あると現場に向かったジェリーは、そこで少女の両親に事件を知らせることになり、驚き、悲しみに暮れる母親に、犯人探しを少女の作ったという十字架にかけて誓い、自分の魂を救済するためにもきっとそいつをつかまえると約束する。

せっかくの穏やかな引退生活を返上しなければならなくなったジェリーだが、現役時代は優秀で信頼も厚かって、引退してまで捜査を勝手に進める彼に仲間の手を返したように冷たくなる。捜査陣は長期戦を覚悟していたところ、その日のうちに犯人として逮捕された知的障害のあるインディアンは、尋問で自白めいた言葉を残して自殺する。目撃者の証言と一致していたので、犯人の自殺を以て事件は片付いたようにみえたが、真犯人が別にいるとジェリー独りが直感する。経験と体力、気力は十分あるものの、社会的に通用する肩書もないまま、彼は一人で独自に捜査を始める。事件の足跡を辿り始めた彼は少女の通っていた学校で、少女が殺される直前に描いた大きな男と少女

自身の絵を入手し、少女がその男を`魔法使い`と呼んでいたことや、「黒い車と小さなヤマアラシ」という謎めいた言葉を少女の友人から聞き出して、絵の中の大男が犯人と確信する。

過去の類似する事件が特定の場所で起こっていることを突き止め、次の事件が起きそうな地域を推測し、犯人が最も姿を現わしそうな地点に位置するみすばらしいガソリンスタンドを買い取って、網を張る。犯人はきっと行動を起こすにちがいないし、そのとき「黒い車」も必ずここを通るだろうというのが、彼が刑事として長年培って来た勘であった。あちらこちらを歩き回って容疑者を絞り込んでいく彼の行動は、時に常軌を逸脱していたために、彼はしだいにアルコールで正気を亡くした老いぼれとして相手にされなくなり、孤立し始める。まもなく、近くのダイナーで働く子連れのウェイトレスのロリ（ロビン・ライト・ペン）と知り合い、ロリの子供がこれまでの一連の事件の被害者の少女と共通する美少女であることに目を止める。

二度の離婚を経験しているジェリーだが、暴力を振るう夫から逃げているロリと親しさをまして三人で暮らし始める。彼がロリに愛情を感じて一緒になったのか、それとも彼女の娘が次の被害者になると直感したから、少女を傍で見張るために共に暮らし始めたのか、あるいは、どちらでもあるのか、よくわからないまま三人はこれまでとは打って変わったような平穏な生活を営み、もはや刑事でもないのに当てのない犯人探しに余生を棒に振るよりも、そのしみじみとした生活の幸せを噛みしめて余生を送るほうがジェリーにとってどれほど満足であるか、といった表情が画面に一杯になる。ところがそれも束の間、少女に付きまとう奇妙な男に気付き、その男が絵の中の「大きな男」と一致し、しかも「黒い車」に乗っていたことから、彼はその男が事件の犯人であると断定する。

ジェリーが犯人とらむ男の実家の店には「小さなヤマアラシ」のお菓子が並べられており、教会で伝道に勤む男は生贄の少女を物色している（素振りである）。ある日、少女がジェリーにこっそりと打ち明ける。「`魔法使い`にお菓子をもらいに、今度ピクニック場に行くの。誰にも内緒よ」彼はかつての同僚の協力を得て、少女が`魔法使い`を待つピクニック場を張る。しかし、時間になっても犯人はなかなか現れない。その頃、犯人とみられた男は「黒い車」に乗って、少女が待っている場所と繋がっている道を走っていて事故に遭い、即死していた。同僚の刑事たちはジェリーの妄想であることがわかって引き上げるが、彼だけは尚も張りつづける。そこへ警察から連絡を受けた母親が少女の許に駆け付け、娘を囮に使ったジェリーに罵声を浴びせて家を出て行く。朽ち果てて一人の客も寄り付かなくなった廃墟のガソリンスタンドの椅子に独り座って、あいつが犯人だ、犯人は必ず現れる、と呆けた表情で呪文のように呟くジェリーの年老いた姿が最後に映しだされる。

仕事に生きがいを見出して、勢いのある人生の大半を注いできた人間が定年退職を迎えて、組織から用済みを宣告され、別の生き方を要請されることになったとき、社会が

らどのような扱いを受け、どういう精神状態に追い込まれるのか、といった問いがこの映画の前提に置かれている。したがって、退職祝いの最中に殺人事件が発生したとき、定年間際の刑事が誰もがそうであるように、これまでと違った別の生き方を受け入れようとしていたなら、捜査に加わることはなかった。だが、彼が定年はまだ6時間後だとして現場に駆け付けたとき、彼には定年後にやってくる自分の別の人生が見えていなかった。たぶん彼は定年後の自分をみないようにして、定年にまで辿り着いてしまったのだ。定年当日がやってきても、彼には定年後の自分がどうやって生きるか、は全くわからないまま捜査に加わってしまったのだ。

被害者の少女の母親の泣き崩れる姿を目の当たりにして、少女の遺品の十字架に犯人逮捕を誓ったとき、彼は途方に暮れていた定年後の自分の生き方を十字架に誓ったのである。犯人逮捕に定年後の自分の人生を費やそうと決心していたので、自分の魂を救済するためにもきっとそいつを捕まえると約束したのだ。プレッジ（約束）はなによりも自分へのプレッジであった。刑事という仕事が骨の髄まで染み込んでいたなら、定年がやってこようと、なにがやってこようと、倒れるまで刑事として生きていく以外になす術はない、と彼は開き直っていたのだ。犯人がどこにいるかもわからない、本当の犯人であるかどうかもわからない迷宮に踏み入ることによって、主人公は定年後の我が身を救ったようにみえて、実は我が身を滅ぼしていったと映るかもしれないが、しかし、滅びというなら、定年後の自分の生き方がみえてこないような生き方を定年前に続けてきたこと自体が、彼自身を滅ぼしていたようにみえる。

なにごとにもすべて終わりがあり、その節目節目の終わりを一つずつ片付けて、最後は自分自身の人生の終わりに直面するというのが誰にとっても避けられない人生の筋道であるけれども、だからといってその節目の終わりを簡単に納得して受け入れていくわけでもなければ、なんの抵抗もしないわけでもない。この映画の主人公のように、自分からデカとしての誇りや自信を取り去ってしまったなら、自分は単なるデクノボウでしかないと思っている男であるなら、周囲からいくらご苦労さんといわれても、自分が自分に対してご苦労さんといえないかぎり、引退は訪れようがなかった。この映画が通りいっぺんの犯罪サスペンスではないのは、社会的な約束ごとである定年など一切受け入れずに、自分から仕事を取り上げるなら、自分で仕事をつくりだしてでもデカを続けていくという、男の尋常ではない強引な執念が全篇を覆っているからだ。

主人公が被害者の少女の母親と十字架にむかって必ず犯人を挙げると約束したとき、それは自分の手で犯人を捕まえるということの意味した。だから別の刑事の手で容疑者が逮捕され、その容疑者が自殺することによって、事件が終了したとされても、彼の約束からすれば、何一つ片付いたわけではなかった。だいいち、彼はまだ自分の手で犯人を捕まえているわけではなかった。そうすると、自分の手で挙げられなくてはならない犯人はまだどこかに潜んで、次の獲物を狙っているということになる。この映画が面白く、かつ厄介なのは、事件は本当に終了してしまっているのに、主人公は自分と十字架

の約束のためにだけ、何の根拠もなく真犯人は別にいると一方的に思いこんで、犯人をつくりだそうとしているのか、それとも主人公の直感に分があって、彼のような老刑事の執念がなければ、どんな事件も本当には片付かないというようなものであるのか、が判然としがたいところにあるのだ。

人間には、それが現実なのか現実でないのか、自分が正気であるのか正気でないのか、一瞬わからなくなる曖昧模糊とした逢瀬が時(たそがれ)に見舞われることがあるが、アニメの『千と千尋の神隠し』のように、映画『ブレッジ』もその領域に踏み入ったところで描かれている。もし主人公が現実から遊離してしまった、独善的な思い込みで囚われているだけの得体の知れない人物で、善意の執念で正義の捜査を行っているつもりであるなら、映画は割合身近にいそうな、そんな不気味な人物をジャック・ニコルソンに演じさせた映画ということになるが、けっしてそんな映画でもない。だからといって、退職した元刑事の鋭い直感とあくなき執念が真犯人を追い詰めていくというような感動ものでもないのだ。すべてに薄い膜がかかって向こうを見通せず、陽炎が漂っている空気に包まれて、主人公だけが約束にむかって着実に犯人に近づこうとしているのだ。

実際、被害少女が描いていた絵の中の「大きな男」が「魔法使い」と呼ばれていたことや、「黒い車と小さなヤマアラシ」という謎めいた言葉など、更に、未解決のいくつかの少女暴行殺人事件との関連など、主人公の直感と確信のみでつながられていく推測はいかにもその通りかもしれないというように、映画は進行していく。主人公が波光きらめく川に船を浮かべて、釣り糸を垂れているシーンがある。定年後の有り余る時間の過ごし方を連想させ、象徴するような目に残る美しいシーンであるが、彼は静かに獲物を待っている。いつまでもいつまでも、待っている。たぶん彼は釣り糸を垂れながら、犯人が食いつくエサのことに頭を巡らしていたのかもしれない。親しくなったウェイトレスの娘が、犯人が飛びつきそうな恰好のエサというように、彼の前に繰り広げられるすべての出来事が犯人探しに結びついていく。というより、犯人探しにむかってひたすら歩む彼の前に現れてくるのは、すべて犯人探しに結びつくような材料ばかりということかもしれない。

ある一つのことを念じていたなら、そのことに結びつくような出来事ばかりが起こってくるようにみえるのは、関心は他の風景を排除してしまっているからだ、といえそうな気がする。別に意図的に子連れに女に近づいたわけでもないし、よくある男女関係のあやとして自然に親しくなっただけであるのに、そして少女も自分によくなついてくれて可愛いく思われるのに、犯人探しの約束から逸脱することがないために、母子と一緒に暮らすという自然な成り行きまでが犯人探しの約束という大枠の中に収められて、少女をも犯人を釣るエサとして自然に利用するように進んで行くのだ。しかもそれら一連の成り行きが彼の妄想とばかりはいえないように、怪しい男が少女に付きまとい、誘い出そうとする。彼は釣り糸の先に獲物が忍び寄っている雰囲気を感じ取っていたし、我々観客も主人公の取り憑かれたような執念が漸く実る瞬間に立ち会えるのを感じ

取っていた。

それまで冷たくあしらっていたかつての同僚の刑事たちが彼に協力して一緒に現場を張るのも、彼が調べ上げた事件の周辺情報と推理をとりあえず信用したからにほかならない。自分を誇れる最後の瞬間が彼に訪れようとしていたし、我々観客にとっても一向に晴れない霧の中の景色をはっきりと目撃する決定的な時に遭遇しようとしていたのだ。しかし、いつまでもいつまでも静かに釣り糸を垂れていたが、少女との約束の時間になっても犯人らしき男は現れなかった。しばらくして現職の刑事たちはいまいましそうな表情を浮かべて現場から去って行ったが、犯人は必ず現れる、というより、犯人探しの約束を成就して完結させるためには、どうしても犯人は現れなければならないことを確信して、彼は独り釣り糸を垂れつづけた。その瞬間まで、そうでなければならないというようにして犯人を探してきたからだ。映画でも主人公の執念に応えるように、男が少女の待つ場所にむかって「黒い車」を走らせる場面を映しだしていた。

だが男の乗った「黒い車」は事故を起こして、現場に遂に現れることなく、主人公の許からかつての同僚たちは去り、犯人をおびき寄せるエサにされた娘に対する仕打ちを憤って母子も去り、彼が独り残されることになった。彼があれほど恐れ、抵抗していた、何もすることのない定年が漸く訪れたのだ。彼の目論見では見事に真犯人を自分の手で挙げて、定年退職で自分を放り出した組織を見返し、自分のような鋭い直感と犯人探しの執念をもった元デカの手が不可欠なことを誇示しようとする予定であったのに、犯人が現れなかったことによって、すべてが水泡に帰することになった。誰も立ち寄ることのないガソリンスタンドの廃墟で主人公が独り椅子に腰掛けている姿は、いまだに犯人が立ち現れるのを待ち受けているようにみえる。彼は犯人を張っていた当日、交通事故が起きて「黒い車」を走らせていた男が死んだことを知らなかったのか、あるいは、その後、男のいる教会に向いて男が交通事故で死んだことを知ったかもしれない。

いずれであれ、彼の思惑外のところで起こった事故が何もかも呑み込んでしまったかのようにみえる。だが、はたしてそうなのか。「黒い車」は現場を目指していたのか、それとも全く別の行先であったのか、最後の最後まで真相が明らかになることはなかった。すべてが不分明なままであった。監督のショーン・ペンは、なぜそこまでやるのかと思われるほど、犯人探しに異様な執念を燃やしつづける一人の男の狂気ぎりぎりの行為が周囲からは妄想とみなされながらも、遂に真実が明らかになる最後の結末を迎えつつあったにもかかわらず、不慮の事故で一切が再び闇の奥に沈んでいく朦朧とした割り切れなさを描くことによって、妄想と執念と割り切れなさの思いのなかで彩られていく人間の一生というものを描きだそうとしたのかもかもしれない。自分となにかへの約束を果たすことで生きつづけようとする執念を燃やしながら、遂に約束が果たせなくなるかもしれない最後を迎えるのが人生ではないのか、という声が主人公の老いさらばえた姿から響いてくる。

2003年1月19日記